Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します

合田 直弘

今月のこのコラムは、来年のG1英千ギニー（芝8F）へ向けてブックメーカー各社が、オッズ6倍から7倍という圧倒的1番人気に支持している、セプテンバーという2歳牝馬を御紹介する。このコラムではこれまでも何度か書いてきたことだが、ブックメーカーたちは2歳戦がスタートすると同時に、翌年春のクラシックの前売りを開始する。そんな中、図抜けた素質を示した2歳馬が、早い時期から抜けた人気になることは珍しいことではないのだが、それにしても、この時期にオッズ6～7倍というのは、あまり見られたことがないほどの1本被りである。ちなみに、牡馬クラシックのG1英二千ギニー（芝8F）で1番人気に推されているグスタフクリントのオッズは、17倍前後だ。

そしてこのセプテンバーという牝馬は、父がディープインパクトなのである。

母は、クールモアが所有して、G1プリティポリーS（芝10F）、G1愛オークス（芝12F）、G1ナッソーS（芝9F192y）、G1ヨークシャーオークス（芝12F）と、4つのG1を制したピーピングフォウン（父ディインヒル）で、セプテンバーもまたクールモアの所有馬である。ピーピングフォウンは09年春から繁殖牝馬となり、最初の2シーズンは愛国で過ごして、2番仔となったサージョンホーキンスはG2コヴェントリーS（芝6F）3着をはじめ、3重賞で入着する実績を残した。

11年春から供用場所を北米に移し、ここでも2シーズンを過ごした後、北米のリーディングサイヤー・タピットを受胎した状態で来日。13年にタピット産駒ヘヴンスグローリー、14年にディープインパクト産駒ウィスコンシンを産んだ後、ピーピングフォウンは14年12月1日に、ディープインパクトを受胎した状態で離日し、愛国に戻っている。2頭の日本産馬のうちの1頭であるウィスコンシン（牡3）は、A・オブライエン厩舎からデビューし、7月9日現在で4戦1勝という成績を残している。

帰国したピーピングフォウンは、15年2月21日に愛国でディープインパクト産駒を出産。この馬が、現2歳のセプテンバーである。

当然のことながら、オブライエン厩舎所属となったセプテンバーは、6月8日にレパーズタウン競馬場で行われたメイドン（芝7F）でS・ヘファーナンを鞍上にデビュー。道中は4～5番手で折り合い、直線に向くと父譲りの鋭い末脚を繰り出して、残り1Fで先頭に立つと、そこから後続を5．1/2馬身突き放して緒戦勝ちを飾った。

セプテンバーの2戦目となったのが、ロイヤルアスコット最終日の6月24日に行われたLRチェシェイムS（芝7F）だった。このレースは1年前、同じくオブライエン厩舎のチャーチルが勝っているレースで、ここを皮切りに2歳シーズン末まで2つのG1を含む5連勝を飾ったチャーチルは、欧州2歳牡馬チャンピオンの座に就いている。すなわち、2戦目は牡馬と走ることになったセプテンバーだった。この日はR・ムーアに手替わりした同馬は、前半は中団後ろ目に待機。残り500m付近から進出を開始し、残り1Fで先頭に立つと、そこから2．1/4馬身抜け出して優勝。デビューから2連勝を飾った。

2戦ともに鮮烈なパフォーマンスで、この結果を受けてブックメーカー各社は冒頭に記したように　同馬をG1千ギニーの前売りで圧倒的1番人気に浮上させただけでなく、G1英オークス（芝12F6y）へ向けた前売りでも、オッズ9倍前後の1番人気に推すことになった。

今後は、8月20日にカラ競馬場で行われるG2デビュータントS（芝7F）から、9月10日に同じくカラ競馬場で行われるG1モイグレアスタッドS（芝7F）に向かう予定だ。

筆者は残念ながらセプテンバーをこの目で見たことがないが、関係者に話を聞くと、かなり小柄な馬体をした馬だそうだ。伯楽オブライエンが、類稀なる資質を持つセプテンバーを、今後どのように育てていくか。大注目と言えそうである。